

交通事故で全身まひになった松尾卷子さん(67)＝富山市磯部町＝と、献身的に世話をする夫の幸郎さん(74)を取材したノンフィクション「卷子の言霊 愛と命を紡いだ、ある夫婦の物語」(講談社)が今夏出版され、話題を呼んでいる。松尾さん夫婦の強いきずなや交通事故の被害者に降り掛かるさまざまな問題を伝えている。

(報道センター・五艘和宏)

著者の柳原三佳さん(47)＝千葉県＝は交通事故について執筆するジャーナリスト。一昨年、幸郎さんから事故体験をつづった手紙が届いたのをきっかけに取材を始めた。

松尾さん夫婦は県出身で、幸郎さんの仕事の関係で20年間を米国で暮らし、平成13年に富山に戻った。事故はその5年後に起こった。富山市内の県道を走行していた卷子さんの乗用車と、反対車線からセンターラインを越えてきた乗用車が正面衝突。卷子さんは脊髄損傷で全身がまひし、まばたきしか自由にできなくなった。

卷子さんは2回転院し、現在富山市内の病院に入院している。幸郎さんはほぼ毎日病室を訪れ、身の回りの世話をする。救いは、会話補助機で卷子さんの意思が確かめられることだ。機械が読み上げるひらがな音に合わせて卷子さんがまぶたを閉じ、同時に幸郎さんがスイッチを押すことで一言ずつ選ぶ。ワンフレーズを紡ぎ出すのに20分ほどかかる作業だが、「ゆきおさんをはんいちあいしています」などの言葉に、幸郎さんは勇気付けられた。

松尾さん(富山)夫婦描く「卷子の言霊」

献身的介護に反響

幸郎さんは会話補助機を介した「会話」の様子を「卷子の言霊集」と名付けたノートに記録している。幸郎さんにとって、卷子さんの声なき声は魂が宿る「言霊」のような存在だという。

卷子さんを支えようと、幸郎さんは転院先探しや民事裁判に苦労した。事故後約4万円。同書は215ページ、1500

取材の柳原さん(千葉)今夏出版



卷子さん(手前)のまばたきに合わせて会話補助機を操作する幸郎さん(右奥)と見守る柳原さん＝富山市内の病院

月で転院を求められたが、療養病床の減少などで受け入れ先がなかなか決まらなかった。損害賠償請求裁判での、加害者側の弁護士とのやりとりも精神的な負担となった。

出版後、柳原さんのもとには読者から手紙やメールが計100通以上寄せられており、「交通事故が引き起こす問題について多くの人に考えてもらいたい」と話してい